

努力する大切さを教えてくれた

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

理事 篠塚 周城

(佐賀県私立中学高等学校協会 会長)

鈴木監督と最初にあった時、監督の熱意は理解したものの、映画製作にどの位の製作費が掛かるか不安でした。そのためには、体製作りが課題でした。

陣内会長が商工会、西久保副会長が水産業へ、大島理事が農業関係などを軸に組織が出来上がり、支援する会の皆さんと連携してそれぞれ知恵を出し合い、課題を乗り越えた成果が映画となって出来上がった。

何より、我が町・我が故郷の有明海苔が克明に描かれ、佐賀の素晴らしい風景もまた映し出されている。その中には、支援する会のメンバーたちが海苔養殖の実態を忠実に再現しロケでの最大の力になっている。

映画では、鈴木監督が随所に佐賀の一般家庭の姿をありのままに表現している。親子が争っている時でも母が取り持つ想いやりや家族愛、それにおじいちゃんの孫への想いなど家族の在り方の表現が実に素晴らしい。

また、大空眞弓さんが「夢があれば生きていける」と、夢があれば前向きに生きていける人生観は、とてもインパクトがあり訴えるものがあった。

それを映画でも現実にやり通した伊原剛志さんは、主役が決まってから毎日6時間以上ピアノと向き合い特訓され、モデルの徳永義昭さんがやれるなら自分でも弾けると努力されたそうだ。夢が叶った伊原さんの役者魂を見た気がした。

そして、クライマックスでは妻役の南果歩さんだけに聴かせたいと頑張る。誕生日と銀婚式のための感謝の気持ちがこもった演奏には涙が出てきた。「夢があれば叶う」努力すれば夢に近づく、この映画が一番表現したい所だと思う。努力している姿が映画に出ると、子供たちや学生たちもやっぱり努力する事の大切さというものを見学していく。特に中高の生徒達には是非に見て貰いたいと願う。

そして、全ての年代を問わず家族ぐるみで楽しんで観賞して下さい。いい映画です。



地元の家具も映画のお手伝い

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

監事 樺島 雄大

この映画は、佐賀県の美しいロケーションを背景に撮影されており、地元の方言が使われていることで非常に親近感が湧きました。

普段、佐賀が舞台となる作品は少ないため、この映画が地元の魅力を広く伝えてくれることにたいへん嬉しく感動しました。



また、撮影に私たちが製作した地元の家具が使用されていたこともあり、映画を違った視点で楽しむことができました。

主人公の海苔師が、50歳を過ぎてからピアノを独学で学び「ラ・カンパネラ」に挑戦する姿は、いくつになっても夢を持ち、挑戦し続けることの大切さを教えてくれます。そのチャレンジ精神には深く心を動かされました。

また、映画を通して家族の絆や大切さについて改めて考えさせられ、温かい気持ちになれる作品でした。地元への愛着と挑戦する勇気を改めて感じられる素晴らしい映画で、心に残るひとときを味わうことができました。

人生の新たな可能性を信じる大切さを教えてくれる、心温まる物語であり、是非、たくさんの人々に映画「ら・かんぱねら」を鑑賞していただきたいと思います。

女優、南果歩の涙に尽きる

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

監事 山口 勝也

涙…

私はこの映画を観て、心打たれたのは最後に伊原剛志さんが弾く「ラ・カンパネラ」のシーンです。もちろん誰もが心打たれ、涙するシーンで映画も最高潮に達する所です。そこには伊原剛志さんと鍵盤それに南果歩さんがトライアングルのように映し出され、その表現が三拍子となっていて瞳に、心に飛び込んできます。

私の眼が潤んでくるような錯覚する程に、南果歩さんの瞳から溢れようとする「涙」に惹き付けられました。

それは、モデルとなった「徳永義昭夫妻」と映画上の「徳田時生夫妻」との完全なるオーバーラップで本物を見ているかと勘違いする程、成りきっています。譜面が進むにつれて、南さんの瞳に溜まりゆく涙は増え、充血し、瞳はうつろとなり、綺麗で真っ黒な瞳は沈み行き、いつしか表面張力の限界を超え溢れ出てしまいます。

しかしそれは、観ている私達の表面張力をも既に超えていました。

素敵な映像で映し出されるのは、有明海や古湯温泉と佐賀の美しい自然など見どころは沢山ありますが、何よりも有明海で働く海苔生産者のドキュメンタリーになっていて、奥深いものになっています。

私にとって、試写会で観たこの映画の感想を括弧書きするなら……「夫婦愛、家族愛におさまり、おさまりきれなかった女優、南果歩の涙」これに尽きました。

映画に関わった全ての皆さん、現場協力はあまりできませんでしたがお疲れ様でした。そして、ありがとうございました。



思い出の一枚



クランクインを祝う支援する会



クランクインで決意を述べる監督



深夜の戸ヶ里漁港



有明海でのロケシーン



優進丸と記念写真



製作開始の記者会見

「ら・かんぱねら」 製作・企画・脚本・プロデューサー・監督として



鈴木 一美 (すずき かずみ)

プロフィール

昭和30年生まれ、秋田県出身

大曲農業高校卒

横浜放送映画専門学院(現・日本映画大学)卒業

合同会社コチ・プラン・ピクチャーズ代表

著作「戦場に輝くベガ 約束の星を見上げて」

(浅野ひろ子氏と共同執筆)一兎舎刊(全国学校図書館図書選定)

代表作

「さよならクロ」(キネマ旬報7位) 2003年公開 ~シネカノン系~

企画 プロデューサーとして

松岡錠司監督 主演:妻夫木聰 柄本明 余貴美子 伊藤歩

舞台の長野県松本市に拠点を置いて製作。実際のモデルとなった松本深志高校で校舎を使用し、生徒や先生もエキストラとして参加した。「動物も受け入れられるような、自由な学校への憧れ」「動物に触れると心が温かくなる(アニマルセラピー)」をテーマに描いた。

「野球部員、演劇の舞台に立つ！」 2018年公開 ~パンドラ配給~

(文部科学省特別選定作品、ぴあ満足度1位)

製作 企画 脚本 プロデューサーとして

中山節夫監督 主演:渡辺佑太朗 林遣都 宮崎美子 宇梶剛士

舞台の福岡県八女市に拠点を置いて製作。八女市に移住し構想から10年を経て公開。地元の皆さんと映画を盛り上げた。「自分の得意はこれ」「自分はこれ一筋だ」と思っていても、新しい世界に入ってみると、見えるものがある」というテーマを爽やかに描いた。

映画「ら・かんぱねら」への想い

舞台となる佐賀県佐賀市に拠点を置いて製作。有明海の海苔師がリストの超難曲のピアノ曲「ラ・カンパネラ」に挑んだ物語。絶対無理だという家族の反対を押し切って、ピアノとは無縁だった男が海苔漁に従事しながら、目標に向かっていき「人間やろうと思えばできないことはない。夢は叶う」といテーマに、家族愛を織り交ぜながら壮大なスケールで描いた。

爆発・抵抗し書き直した脚本



洞澤 美恵子 (ほらさわ みえこ)

プロフィール

昭和23年8月3日 和歌山県生まれ
シナリオセンターで脚本を学ぶ
企業の販促ビデオなど製作

代表作

土曜ワイド劇場「石狩川殺人水系」
ドキュメンタリ一人間劇場「山間の家族」
笹沢佐保原作の「取調室」

エエ！？ 同じ感動！？ と嬉しくて思わず胸が高鳴りました。徳永義昭さんをモデルに映画を撮りたいと、監督から資料を渡された時の事です。

十数年前、テレビ放映されたフジコ・ヘミングさんの「ラ・カンパネラ」の演奏を、徳永さんが感動して聴き入っていました。まさにその時、実は私も感動しテレビに釘付けになっていたからです。大きく違ったのは、徳永さんはご自分も弾いてみたいと、果敢なチャレンジを誓ったのに対し、私はただただフジコ・ヘミングさんの大ファンになっただけでした。それにしても、有明の海苔漁師さんがラ・カンパネラを！？ 凄い方がいるものだと驚きました。圧倒され、是非書かせて頂きたいと思いました。

あれから六年と感慨が過ります。脚本執筆は、監督の溢れるほどのアイディアに助けられ支えられ、でも時に、そんなに何もかもはムリッ！と爆発し抵抗しながら直しを重ねました。打ち合わせの喫茶店で、お互いに断固譲らず喧々諤々、バンッ！とテーブル叩き、大声出して店から叱られたこともあります。脚本は映像化されてナンボです。どんなに精魂傾けた作品でも、映像化出来なければ紙屑同然と言っても過言ではありません。絶対にカタチにするぞ！と固く決意したものの、映画一本を創り上げるのは並大抵ではない事もよくわかつっていました。

長い間、練りに練って漸く決定稿に漕ぎつけても、頓挫の憂き目に遭うのは決して珍しい事ではないからです。果たしてカタチになるだろうか？という不安は常にありました。糸余曲折を経て三年が過ぎた頃には、あまりに直しを重ね過ぎて一番大事な幹を見失してしまわないかと隘路に嵌ってもがいた時期もありました。更にはコロナ禍の閉塞感もあり、このままお蔵入りかもしれないと危機感を募らせたこともあった中、今こうして沢山の、本当に沢山の方達のご支援とお力添えを頂き、関係者の皆様の多大な努力が結実して公開まで漕ぎつけられた事、感無量、感謝の思いでいっぱいです。

脚本家になってからずっと、佐賀は私の第二の故郷だと勝手ながら愛着を抱いてきました。デビューした直後に書いた、佐賀県警が舞台のいかりや長介さん主演「取調室」という二時間ドラマが、幸いにも好評でシリーズ化され私の脚本家人生を切り拓いてくれたからです。執筆前には毎回、舞台になる佐賀県内をシナリオハンティングで訪れた事を懐かしく思い出します。

映画「ら・かんぱねら」で再び佐賀とのご縁が更に深まった事、私にとっては無上の喜びです。あとは一人でも多くの方達にこの映画をご覧いただける幸せを祈るばかりです。

映画「ら・かんぱねら」プロデューサーとして



川口浩史 (かわぐち ひろふみ)

プロフィール

1970年8月31日 東京出身

トロッコフィルム株式会社 代表

日本映画学校(現・日本映画大学)卒

篠田正浩、五十嵐匠、黒沢清作品で助監督

トロッコで初監督を務める

受賞歴

第20回多摩映画祭新人監督賞

2010年全国映連賞監督賞

第20回日本映画評論家大賞新人監督賞

代表作

おしょりん

ラインプロデューサー

島守の塔

プロデューサー

蜜蜂と遠雷

助監督

トロッコ

監督/脚本

チヨルラの詩

監督



「徳永義昭氏の奇跡」に吸い寄せられ、映画プロジェクトに参加した僕は、徳永さんご本人とお会いし、その人柄、愛嬌、人情、努力、約束に魅了され、半端な覚悟では挑めぬと佐賀に住むことにした。連れ込み宿という名がふさわしい郊外のラブホテル前の一軒家の合宿生活。そこから佐賀県内で協賛社挨拶に回り、夜は佐賀の大人たちが集う魅惑の繁華街・白山に半年間通った。「東京モンが佐賀さい来て、他人様のお金で映画撮るち、オマエ何様や！」と言われたことが僕に更なる覚悟を決めさせた。

「佐賀の人々が心から喜ぶ作品にしなければいけない」と、東京から来るスタッフ、キャストの選定にも生半可なことはできなくなった。イン直前のキャスト降板などの大事件勃発もあったが歯を食いしばるしかない。なぜなら、他に本業のあるボランティアメンバーが、徹夜してこの映画に挑んでいるのだから。そうして、日本映画界随一の映画スタッフ・キャストたちと地元「支援する会」のタッグによって、佐賀発信の映画は、出来上がった。

それは、「徳永義昭氏のキセキ」から触発された、佐賀の新たなる「奇跡」となった。

お見事、佐賀。はばたけ、佐賀！！

映画「ら・かんぱねら」製作配給プロデューサー



桑山和之 (くわやま かずゆき)

プロフィール

1954年、東京都出身
配信事業「キネマNET」代表
プロデューサー
独立プロ作品を中心に現場に立ち、現場製作から配給まで、劇映画・ドキュメンタリー作品に関わる。

代表作 (プロデューサーとして)

「春駒のうた」('85)神山征二郎監督、「イタズ」('87)文部省特選、日ソ合作「オーロラの下で」('90)後藤俊夫監督、「戦争と青春」('91)今井正監督・モントリオール世界映画祭出品、「深い河」('95)熊井啓監督・モントリオール世界映画祭出品、「野球部員、演劇の舞台に立つ！」('18)文部省特選、中山節夫監督。

映画「ら・かんぱねら」への皆さんの思いを受けて。

今、配給の真っ最中の僕が思うのは、佐賀の人たちのこの映画に対する熱い思いである。資金集めから始まり、撮影中、そして上映と約1年半に及ぶ取り組みで、通常であれば撮影が終わった時点で、スゥーっと火が消えるように人もいなくなっていくのだが、上映の段階で、さらにパワーアップをし、イオンシネマ佐賀大和を連日の大入満員にする力は、今まで色々な地方で50年撮影てきて、どの地方にもなかった力である。

支援する会の方々は、仕事を持つ中でも、朝、早くから劇場へ足を運び、気持ち良くご観覧頂けるように、お客様へのケアするこころは半端な気持ちで出来るものではない。それは、自分たちの映画・佐賀の映画だと言う皆さんの強い気持ちの表れだと僕は感じる。

モデルである徳永さんの生き様は、また支援する会の皆さんにも流れ、作品自身にも流れる諦めない心だと思う。

この諦めない心を僕自身も学び、そして粘り強く微力ですが、地道に一歩一歩、進めていく所存です。今後ともお力をお貸しください。

惜しまない協力に感謝

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

美術 黒瀧 きみえ

佐賀の地に足を下ろしたのが2024年2月でした。広々とした佐賀平野を有明海からの風はとても穏やかだったことを覚えています。

そこで登場する私のお助けマンは、芝居の軸となる「徳田家」やピアノ部屋を作る倉庫、それに「石田家」を加工してくださった山崎建設のNice Guys(山崎、佐保、中町)の3人で、最初は「なんのこっちゃやら」の参加だったでしょう。そして、人が住まう家を色付けしてくださった大坪さんの造園チームと、(株)ナガノの平原さんたち看板デザインチームのみなさんも一緒です。もちろんその前に、屋根に登り重機を動かし隅々までお掃除をして、神秘のベールをOpenにしてくださった屈強で繊細な支援する会のみんながいて「徳田家」のプランができあがったのです！そこからさらに、レグナックの樺島さんや李莊窯の寺内さんのお力を借りて生活感が出せました。



「助けて！」の一言で駆けつけてくださる川原ご夫妻や、いつも気にかけて「いいよ」といってくださる川崎ご夫妻、そして電話一本で大波を作る成人さんチームやこっそり駆け込む先に佳子さんなど、まだまだ沢山のみなさんの惜しまない協力に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。益々のご繁栄をお祈り申し上げます。

支援する会の皆さんの団結力に感動

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

装飾部 丸山 瞳

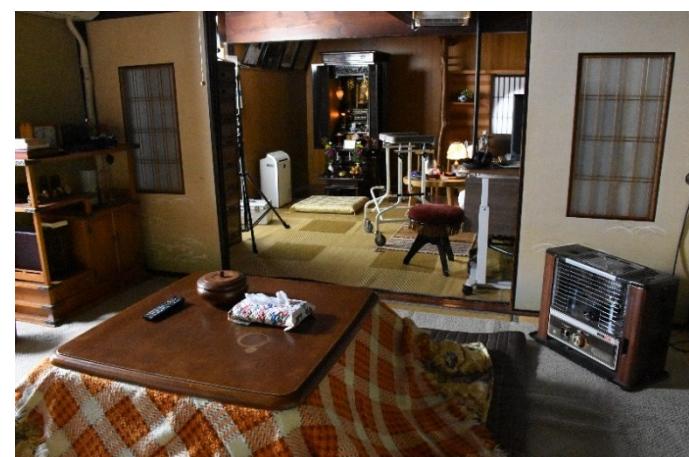
2月から佐賀でのロケハンが始まり、3ヶ月間は長くもあり、とても短くもあり濃密な日々でした。東京での撮影とは違い、初めての場所や出会った人たちとの触れ合いは新鮮で興味深い時間であったと思います。

特にお世話になった川原夫婦は、私のピンチを何度も助けて頂きいつも笑顔で暖かく迎えてくれて感謝の気持ちでいっぱいです。



海苔漁はとても奥深く、佐賀で食べた海苔は今まで食べたことがない美味しさでした。映画「ら・かんぱねら」を通して、世界中の人に海苔を知ってもらい、食べてもらえたらしいですね。

支援する会の皆さんの団結力はとても素晴らしい、皆さんの協力無くしてこの映画は完成しなかったと思います。これからも映画を通して知り合った皆さんと繋がっていけたら嬉しく思います！また会える日を楽しみにしております！ありがとうございました！



酒と旅好きが佐賀行きを決意

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

チーフ助監督 原島 孝暢

この原稿を書いているのは、令和6年11月30日土曜
締め切りギリギリの日、私は夏休みの宿題は最後の日
にやるタイプ、そんな私と映画「ら・かんぱねら」という
作品が出会って約一年…ってまだ一年…そう思うくらい
濃い佐賀との一年だった。

始まりは太田和彦さんの「ふらり旅 新・居酒屋百選」
という全国を飲み歩く番組を見ていた時のこと、この日
は佐賀の「のこ」というお店が紹介され、その魅力にお
酒と旅好きの私は、佐賀に行きたい！と強く思い始め
たのでした。

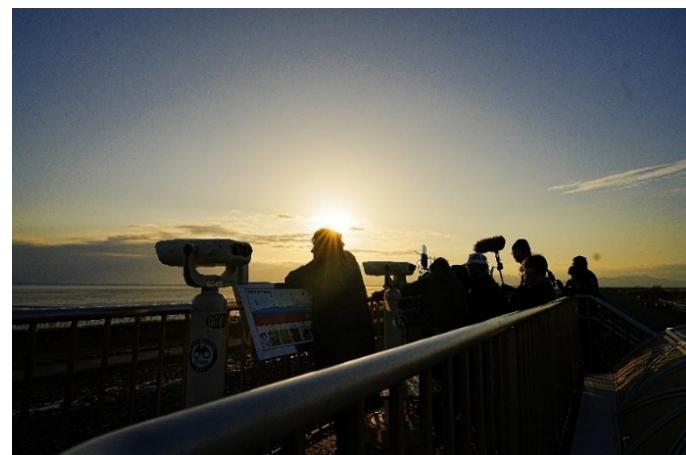
次の日、前回お仕事でご一緒した馬越さん（製作担当）
からお電話を頂く。

「佐賀の映画と一緒にやりませんか？」

なんと！行きたいと思ったばかりの佐賀の映画！こ
れは…佐賀に呼ばれている！と、自意識過剰気味に
「やります」と即答したのである。

そんな縁で繋がった映画「ら・かんぱねら」は佐賀の
方々の熱意とその気持ちに応えようとするキャスト＆ス
タッフ、エンドクレジットに載っている一人一人の思いが
映画を完成に導きました。どうかその思いを最後まで
見届けて頂けたら幸いです。

そして佐賀以外で鑑賞された方はぜひ佐賀に行って
みて下さい。きっと映画「ら・かんぱねら」で繋がった町
や人々との素敵な出会いが待っています。



貴重な経験の数々に感謝

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

製作部 馬越 昭光

映画を鑑賞しました。映画撮影のスタッフとして、参加していましたので、内容は把握してたのですが、予想以上の臨場感があり、撮影当時の事が次々と蘇ってきました。

私は製作部という立場で現場の世話係として参加していました。実際の撮影が潤滑に進行出来る様に、海苔漁師さん達、支援する会の方々、ロケ場所の担当者の方々との事前の打ち合わせを何度も行い、それをスタッフに伝えていました。海苔漁を行う俳優陣の事前練習として海苔の摘採作業にも同行させて頂きました。

また、主役の時生が弾く斯坦ウェイのピアノを「バルーンミュージアム」から「さがレトロ館」、そして「川副の漁師宅の倉庫」に運ぶ段取りも行いました。大変大きなピアノですので、どうやって部屋に入れるのか？と心配しておりましたが、ピアノ運送の方々が事前の寸寸、打ち合わせをしっかりして頂き、無事に運送する事が出来ました。

そのピアノ運送の件で、佐賀の新聞に掲載されたりもしました。普通に生活しているとまず経験出来ない事ばかりでした。

これまで数々の映画・テレビ作品に携わってきましたが、これほど色々な貴重な経験が出来た作品は無かつたです。この作品に携わって大変嬉しく思います。

佐賀の方々にも大変良くして頂きました。

本当に有難うございました。また遊びに行きます。



素敵な作品に参加でき光栄

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ
アシスタントプロデューサー はりま けて

この度は素敵な映画作品に参加できて光栄です。

私は映画「ら・かんぱねら」にアシスタントプロデューサーとして関わらせていただきました。作品の撮影が始まる前、まず佐賀の地に降り立った時から、佐賀に住む皆様のあたたかさと人情の深さに感銘を受けました。



忙しい時に握っていただいたおにぎりの味が忘れられません。今ではすっかり佐賀米の虜になりました。

我々製作スタッフは“映画「ら・かんぱねら」を支援する会”的な皆様と共に作品を作り参りました。

本当に大変なことも沢山あり、楽しかっただけでは済まされない作品だと思います。常に目標をかけ、力を注いでくださっている皆様へ今一度深く感謝いたします。

映画を観たみなさま、これから観るみなさま、是非この映画を末長く共に愛していただきたいと存じます。



新聞掲載から



52歳から独学 徳永さんモデル

フランス・リストの難曲を独学で習得した佐賀市川副町のノリ漁師、徳永義昭さん(63)をモデルにした映画「ら・かんばね」が制作されることになり、県内の経済、漁業、農業団体などでつくる「支援する会」の発会式が16日、佐賀市のホテルであった。

徳永さんはピアニストのフジコ・ヘミングさんの娘。奏に心を打たれ、52歳のときピアノを弾き始めた。ノリ養殖のきつい作業のかたわら、1日に10時間鍛錬。するなどの努力の結果、プロでも難いとされるリフ

「習得の姿」
もとに通い、シナリオを練り続けた。徳永さんの努力と、それを支えた夫婦愛、家族愛、ノリを育む有明海の美しさ、ノリ養殖の戦いなど、を盛り込みながら描くという。会には孫井君の「貴島園系の笑い」と書かれていた。田原さ

許をもち、映画「硫黄島の手紙」「半落ち」など、伊原剛志さ

れが主演に決まったこ

も報告。徳永さんは「あ

りにかっこいいんじやな

か」と感想をもらし、会

佐賀

ルリ子さん

ヤストが6曰、原剛志さんのぎ
ルリ子さん、ハ
形拳さんの孫
きらめなけれ
の姿を丹念に

妻役には南果歩さん、元ピアニストの父親役は不破方作さんが務め、息子の繕形敦さんを起用する。鈴木一美監は、なんとかなるかもしねないといふことを抱負を述べた。

役には緒
役には浅丘
監督は「あ
う主人公

ス・ジヤハ、佐賀アランプリに選ばれた佐賀出身の俳優川崎瑠奈さ
（25）も出演する。



映画「ら・かんぱねら」配役発表

笑いコンビ「どぶろつく

佐賀 2023年(令和5年)10月17日(火曜日) 言
発会式の記者会見で笑顔を見せ
る徳永さん(左)と鈴木監督

2023年(令和5年)10月17日(火曜日) 言
発会式の記者会見で笑顔を見せ
る徳永さん(左)と鈴木監督

武骨な手でつかんだ夢の物語

漁師ピアニスト映画化

式では徳永さんが実際に「ラ・カン・パネラ」を演奏。「緊張して綱渡りの演奏だったが、何とか終えることができた」と言い、「自分が

武骨な手でつかんだ夢の物語

漁師ピアニスト映画化

支援する会発会制作費支援呼びかけ

独学でピアノに取り組み、リストの難曲「ラ・カン・パネラ」を弾く佐賀市川副町のノリ漁師徳永義昭さん(63)がモデルの映画「ラ・カン・パネラ」がつくられることが、16日、支援する会が同市のホテルで発会式を行った。「武骨な手でつかんだノリ漁師の物語」の完成に向け、制作費などの支援を呼びかけた。

映画やテレビドラマを手がけている鈴木一美監督が制作し、今月からノリ養殖の先行撮影を始め、来年秋の公開を目指している。徳永さん役は、映画「硫黄島からの手紙」などに出演した伊原剛志さんが演じる。

支援する会の陣内芳博・県商工会議所連合会会長は「徳永さんは、夢を持って努力することの大しさを教えてくれた。ノリ養殖の仕事も同じで、多くの苦労を経て私たちの口に入る。ぜひ子どもたちに鑑賞してほしい」と話した。

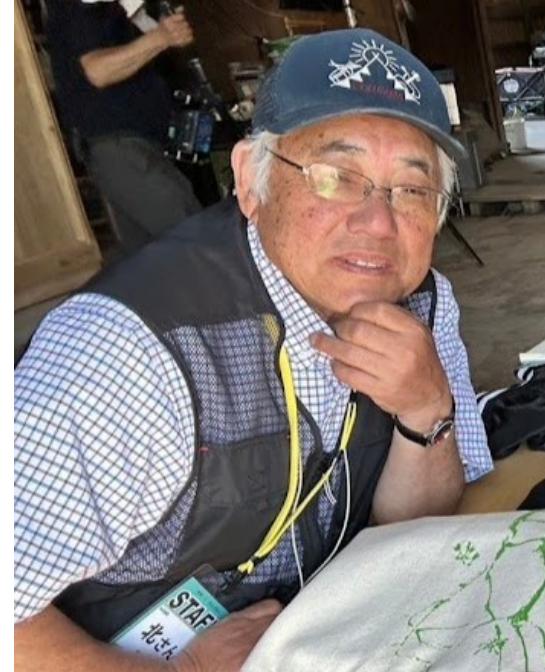
発会式の記者会見で笑顔を見せ
る徳永さん(左)と鈴木監督

メディア担当は、恩返しのため

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
アドバイザー兼 配給宣伝プロデューサー
北村 和秀

偶然にも、「のり道楽」に行ったときです。「映画を作ります。手伝ってくれませんか」と川原常宏事務長から声を掛けられ「いいですよ」と何気なく返事しました。これがキッカケです。

私は、川原さんのお父さんに親父ともども大変にお世話になり、まだ恩返しもしていません。多分、お父さんから「経験を生かして手伝ってほしい」と呼ばれた気がしてなりませんでした。それならば、事務長の後押しをしながら、マスコミ対応など不慣れなところから支援していこうと決意しました。先走りの感はありますが全力投球しました。ただ一言「恩返し」の為です。早速、メディア担当をさせて頂きましたが、次々に要望などが舞い込んで来ました。メディアの皆さんから、クランクイン



は？伊原剛志さんのピアノのシーンは？浪漫座は、エキストラはいつ出演しますか？等々、時間関係なく連絡が入ってきます。アタフタしながら川口プロデューサーや原島助監督に相談します。このシーンは伊原さんが集中する事になるから撮影はNGをお願いしますと言われ、心苦しいがメディアの皆さんに報告して理解して貢います。ただ、強い要望があった伊原剛志さん、南果歩さん、大空眞弓さん3人が揃う記者会見を実現したいと、粘り強く要請し続けセッティングが出来ました。

映画のロケ情報は、毎日夜に翌日のスケジュールをメールで頂きます。福岡のメディアには直接連絡しますが、佐賀のメディアには、佐賀市役所の広報を通してお願いしていました。4月1日のことです。メディアの皆さんから熱望があった3人の合同記者会見は4日の浪漫座での撮影後に行いますと連絡がきました。夜の11時頃でした。慌てて「囲み取材の日程変更」のメディアリリースを書き、朝一番で届くよう佐賀市の広報宛てにメールしました。申し訳ないと思いつつもでした。翌日、広報担当者から叱りを頂き、深く反省しますとお詫び致しました。また、上映開始までは「ら・かんぱねら」週間と題し、全てのメディアの方に協力して頂きました。

皆さんご協力で映画の観客動員が大盛況となっていると思います。心より感謝の気持ちで一杯です。その中でも最高にみんなが驚いたのは、佐賀新聞での一面広告でした。広告費がなく苦戦していた時、広告センターの知り合いたちが新たな協賛を集めて実施してくれました。凄かったです。ありがとうございました。感謝感謝です。

素晴らしいプロ集団と出会えて幸せ

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

ドローン撮影 井上 一也

2023年のある日、支援する会事務長の川原常宏さんから電話が入りました。「今度佐賀で映画の撮影があるから手伝ってほしいとの事。内容はわかりませんでしたが、日頃からお世話になっている川原さんからのお願いだから、有りがたかったです。それがこの映画「ら・かんぱねら」でした。ほどなくして鈴木監督自ら私の事務所にお越しになってお話をさせていただくと、ドローンの撮影をお願いしたいとのことでした。

いつもテレビコマーシャルの為にはドローン撮影をしているものの、同じ映像でもコマーシャルと映画では世界が違います。正直、不安でした。初回の撮影は海苔網を張ったばかりの有明海。「監督からあれやこれやと指示があるんだろうと」覚悟して撮影に臨みましたが、まさかの「ほぼ指示無し」。

初めて映画撮影に臨むカメラマンとしてはパニックです。できる範囲でキレイな画が撮れるようにフライトしましたが、後から見た映像は私の「迷い」まで映っていました。劇中で大事なシーンになるとと言われた風見鶏のカットでは闇夜の中、月明かりを作り出すために大がかりな照明が組まれていたのを思い出します。

これが映画の世界だ。照明さんの技術だと感動しました。闇夜に月明かりを作り出す照明さん。強風の中で船のエンジン音まである中でクリアなセリフを収録する録音さん。脚本の素晴らしさは皆さんご承知の通りですが、裏で支えるスタッフの方々もまた素晴らしいプロ集団でした。表に立つ俳優陣と裏で支える技術陣が表裏一体となる。これが映画の世界だと思います。

鈴木監督、川原事務長はじめ関係者の皆様、貴重な経験をありがとうございました。



役者の自然な佐賀弁に驚いた

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

方言指導 大島 一樹



私が「方言指導」を初めてしたのは、2006年公開の映画「佐賀のがばいばあちゃん」。それまで方言指導の経験はなく、ただ佐賀弁の歌をプロデュースしたり作詞したりしていて、その経験を買われてのことでした。

今は亡きヒーマンさんが歌った歌、覚えてる方もいらっしゃるかも？今回この映画に関わらせて頂くことになったのも、そのご縁が続いていたからでしょう。でも「がばい」の時と違ったことがいくつも有りました。「がばい」の時は、台本に佐賀弁の赤をいれると監督さんから「他の県の人にはチンパンカンパンなので、もっとわかりやすく！」と何度も言われました。なのでイントネーションで勝負！的な考えでした。そして今回は「おまかせします」と監督。なので、かなりネイティブに近い会話になっていると思います。他の県の方、どのぐらいわかりますかね？

また主演の伊原さん、南さんなど、とても熱心に佐賀弁に取り組まれ、自然なアドリブも出るほどでホントに驚きました。細かい確認を何度もされ、つられて熱が入ったことも。

ただ一回だけ「精が出るなあ」という台詞を「精のずんなあ」に訳した際、伊原さんから「これは理解できない」と言われ、えっ？となりました。言われてみれば、そういうものかと納得。方言の佐賀弁はやっぱり難しい！モノですね。

俳優さんは佐賀弁をやるき満々

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

方言指導 江口 美智子

約1ヶ月近く、撮影現場において貴重な体験をさせて頂きました。私は、女性の俳優さん担当でした。奥様役の南果歩さんはじめ、皆さん、佐賀弁をやる気満々が溢れ出ており…嬉しく思いました。

南果歩さんの佐賀弁は、とても素敵で、映画を見た瞬間、佐賀にすっかり馴染んであると感心しました。南果歩さんが話す佐賀弁は、とても可愛く聞こえて…つい、笑みが溢れました。

本音を言えば、もっと伊原剛志さんみたいに、コテコテの佐賀弁で話して欲しかったのですが…そこは、女性らしさもだしつつ！

大空眞弓さんも、「私もどこかで、佐賀弁を話したい」と…流石にベテラン俳優も佐賀弁の雰囲気バツチリ。

この映画を観た全国の方達が、佐賀弁を好きになってくれたら、とても嬉しいです。映画が終わった瞬間、皆さんが拍手をされ、私はとても嬉しかったです。

本音を言えば、南果歩さんに「いやーちゃあがつかー」と言ってもらいたかったです。
(笑)



想い出の一枚



城内公園での撮影風景



白石・修道館での剣道シーン



有明海での撮影風景



東与賀干潟公園での撮影風景



海苔小屋での録音風景



嘉瀬川ダムでの植樹シーン

主な製作スタッフ



音楽 坂田 明

ミュージシャン。1945年広島県呉市出身、広島大学水産学科卒業
1972年に山下洋輔トリオに参加
1980年より「Wha ha ha」「SAKATA TRIO」を結成
ヨーロッパツアーを皮切りに独立
以後、様々なグループの結成解体を繰り返しながら
世界中をあちこちぐるぐるしながらあれこれして今日に至る。
<http://www.akira-sakata.com>



撮影 丸池 納

1948年生まれ。1972年日活撮影所契約撮影助手として入所
撮影監督姫田真左久に師事
1986年根岸吉太郎監督「ウホッホ探偵隊」撮影監督デビュー
和田誠監督「怪盗ルビイ」('88)、市川準監督「ノーライフキング」('89)、小栗康平監督「眠る男」('96)、根岸吉太郎監督
「絆・きずな」('98)、張加貝「さくらんぼ 母ときた道」('08)、
竹下昌男監督「ミッドナイト・バス」('18)などを撮影。



照明 山川 英明

48以上の映画照明を担当
代表作には、2022年公開の「島守の塔」
2022年公開の役所広司主演の「峠、最後のサムライ」
2018年八女市で撮影した「野球部員、演劇の舞台に立つ」
2014年公開の「蜩ノ記」など
受賞歴は、「蜩ノ記」で照明技術賞
日本アカデミー賞では、「カンゾー先生」「峠 最後のサムライ」で優秀照明賞を受賞する。